**超がつくほど変態になってしまったお嬢さまと執事の物語　体験版**

　･･････私がお仕えするお嬢さまは、まさに絵に描いたような名家の令嬢といっていいだろう。

容姿端麗、才色兼備、おまけに頭脳は明晰で知能指数も高いが、性格は高慢で、物言いは高飛車で、時には人を見下すような態度で他人と接する――そんなお方だ。名は宝満院麗香という。宝満院家は由緒ある家柄で、高身長美丈夫の父親と、人気グラビアモデルでもあったウクライナ人の母親の間に生まれたお嬢さまは、ふたりの血を色濃く受け継いで、まさに名家の令嬢の見本のような姿をされていた。

　お嬢さまの顔立ちは、整った卵形をしており、サファイアを彷彿とさせる大きな瞳と、瑞々しい薄桃色の唇、それにツンと尖った小さな鼻が、芸術的なバランスでもって顔の各所に配置されている。手足は細く華奢であり、シミひとつない白い肌は透き通るように美しく、縦ロールの金髪は豪奢で豊かだった。これだけでもすでに充分過ぎるほど恵まれているというのに、その肉体も、まさに豊満恵体を絵に描いたような見た目をしているのだ。

　お嬢さまの乳房は、大人でも片手では掴めないほど大きく重々しく実っており、圧倒的な存在感を放ってやまない。乳圧で、衣服のボタンが内側から弾け飛んだことが一度や二度ではなかった。大きな乳房同様、お尻もやはり大きくて肉付きがよく、ズボンの上からでもはっきりと割れ目が判るその見事な桃尻は、南米で開催されている美尻コンテストに参加すれば間違いなく優勝できるほどのスペックを有していた。これで手足は細く、腰はくびれ、太腿はほどよくムチムチしているのだからたまらない。バスト一二〇センチ、ウエスト五十五センチ、ヒップ九十二センチという数値をみれば、お嬢さまがいかに日本人離れした体型であることを理解できるというものだ。

　女性の魅力を引き立てる部位だけに肉が付き、全身から淫香のように雌の色気を漂わせ、道を歩けば誰もが振り返り、男であれば本能的に勃起せずにはいられない。後ろ姿に欲情し、揺れる爆乳を目の当たりにしただけで、発情した猿のように無意識に射精してしまった同級生を私は何十人と知っていた。幼少期からお仕えし、その蠱惑的魅力に対する耐性を備えていなければ、私もその列に加わっていたに違いない。下賤な言い方になってしまうが、お嬢さまは、まるで男を喜ばせるためにこの世に生を受けた――そんな女性なのだった。

　そんなお嬢さまに、私は前述の通り、生まれた時からお仕えしている。それこそ、赤ん坊の頃から、かれこれ十八年の長きに渡ってだ。幼少期は幼なじみとして、次いで学友として、義務教育が終了してからは執事として、そして現在は――。

　　　　　＊

　私が生まれた時から麗香お嬢さまにお仕えしている理由は実に単純で、私の家が、代々、宝満院家にお仕えする家系だったからである。

　豊満院家は由緒ある家柄だ。その歴史は遡れば千年以上の長きに及び、華族であった時代もあれば朝廷に仕えていた時代も確認できるという。歴史の教科書に載るような偉人に仕えた人物も何十人と輩出しているそうだ。

歴史の積み重ねが、権力と財力の蓄積に繋がるのは人類史における真理である。それは宝満院家とて例外ではない。歴史上における戦乱苦難災難を乗り越えて、いまなお存続している宝満院家は、現在も強い権力と多額の資産とを有している。政治家や財界人との繋がりは濃く、広大としか形容できない面積の土地を日本中に持ち、幾つもの大企業や銀行を支配して、その資産額は一兆円を超えるそうだ。

私の一族は、そんな豊満院家に仕える家系として、代々に渡って執事や家令として宝満院一族にお仕えしてきたのだった。

私の父は、執事長として旦那様にお仕えしている。母も、メイド長として奥様にお仕えしている。兄と姉も、やはり執事とメイドとして、麗香お嬢さまのご姉兄にお仕えし、それぞれ職務をまっとうしていた。

　私たち家族は、生涯に渡って宝満院家にお仕えすることが確定しているわけだが、これは決して悪い人生とはいえなかった。

支払われる給金はかなりの高額だし、衣食住のすべてが高品質のもので保障されていた。虐待されることもなければ無下に扱われることもなく、誠実にお仕えすれば、かなりの厚遇を受けることもある。場合によっては恵まれた地位を賜ることもあり、兄などは、その優秀さを認められ、大企業の共同経営者として辣腕を振るっている最中だ。

　だが、私にそのような機会はないだろう。いまのところ、絶対に。

　その理由は、私がお仕えする麗香お嬢さまにあった。

　　　　　＊

　･･････私は現在、軽井沢にある広大としか形容できない宝満院家の別荘に住んでいる。それも、麗香お嬢さまとたったふたりきりでだ。

別荘には、時おり、外部の業者が出入りすることはあるものの、基本的に他に使用人はいない。誰ひとりとしてだ。この理由は、私がお仕えする麗香お嬢さまにあった。

　かつては普通だったお嬢さまが、突然、変態になってしまったのだ。

　それも、超がつくほどの変態にだ。

　･･････最初の変化は些細なものだった。いまにして思えば、おそらく、お嬢さまが二次性徴を迎えた頃だと思う。その頃から、会話の端々に、卑猥な言葉が混じりはじめたのだ。旦那様も奥様も、お嬢さまの変化に気づいて、眉をしかめたり、たしなめられたりすることはあったが、その頃はまだ、個性のひとつとして寛容に受け止められていた。

　だが、お嬢さまの変化は、ゆっくりとだが、確実に進行していった。まるで病気が進行するように、あるいは肉体の成熟に合わせるようにして、変態的言動がどんどんエスカレートしていったのである。

　財力にものを言わせてアダルト漫画やアダルトゲームを大量購入するようになったり、卑猥な動画やアニメを視聴して、大人が使用する玩具でもって昼夜を問わず自慰行為にふけり、公共の場で胸部や陰部の露出を試みたり（阻止はされたが）されるようになった。その他にも、夜間に全裸で外出しようとしたり、人前で放尿を試みたり、さらには飼い犬と性行為をしようとするなど、端からみれば気が触れたとしか思えない行動を繰り返すようになってしまったのである。違法薬物にまで手が及ばなかったのは、不幸中の幸いといえた。

　当然、大問題となり、何人もの有名な精神科医が診察した結果、出された診断はいずれも同じだった。

「性的欲求の爆発に伴うストレス症候群」

これは後で判明したことなのだが、お嬢さまは、もともと、かなり強い性的欲求を抱きながら過ごしてきたようなのだ。ホルモン検査でもそれを裏付ける数値が確認され、肉体の異常な成熟も、分泌される女性ホルモンの高によるものだと推測された。

性欲の高ぶりは、発散できなければ地獄である。

それが異常性欲となればなおさらだ。

しかし、名家としての環境が、本性の暴露を許さないどころか、発散もできず、当人もそれが判っていて、理性でもってその異常性欲をずっと抑えてきたようなのであった。だが、二次性徴をきっかけに、肉体の発育と成熟が加速すると、性的欲求の不満がついに爆発して、先のような変態的行動をとるようになってしまったのだった。

　診断を受け、かなり強い精神薬が処方された。だが、飲んでもまったく効かないどころか、症状がかえって悪化してしまったのだ。お嬢さまの性的嗜好が、歪みに歪んでしまったのである。どれくらい歪んでしまったかというと、拷問、輪姦、凌辱、肉便器、獣姦、蟲姦、触手姦といった、実に香ばしい単語を聞けばお嬢さまの性癖がどのように歪んでしまったか想像も容易いだろう。しかも、様々な精神薬を飲んだせいで、自分で慰めるだけでは解消できず、他人由来の刺激でしか満足してイケなくなってしまったのも、副作用としては巨大だった。

　旦那様も奥様も、最初はどうにかお嬢さまを矯正しようと、治療の道を懸命に模索されていたのだが、「性奴隷の肉便器になって、病気持ちのホームレスに輪姦されるアダルトビデオに出演したいわ」という話を聞いたとき、ついに心が折れてしまわれたのだった。

ボキッ、と。

「アレはもう、娘ではない。娘の姿をした、別のナニカだ･･････」

そう言って、この世の終わりを目撃されたような顔をした旦那様の表情を、私は生涯忘れることはないだろう。

　しかし、それでもさすがに精神病院に入れるのは酷と思われたのか（あるいは入院させることで世間に知られることを恐れたのか）、軽井沢の別荘で隠遁させることで妥協されたのだった。そして、超がつくほどの変態になってしまわれたお嬢さまの面倒を見る役割として、私が帯同することになったのである。

　軽井沢に出発する前、私は旦那様に呼ばれた。

そして、厳命を受けた。

「アレが望む通りにしてやれ。カネも、幾ら使っても構わない。ただし、どんな手を使っても、アレを二度と外界に出すな。絶対にだ。わかったな」

「はい、承知しました」

娘にかける言葉にしては、あまりにも冷酷な内容としかいいようがなかった。

　おそらく、この時だったはずだ。私の心に、小さな「野望」が芽生えたのは･･････。

　　　　　＊

　･･････軽井沢にある宝満院家の別荘は、旧市街地からも別荘地からも離れた僻地にある。もともとは、馬術を練習するための施設として建てられる予定だったが、軽井沢が別荘地として開発されると、その流れに乗って用途が変更されたのである。

　別荘は、建てられた当初は純和風の建物だったが、戦後に改築され、現在は広壮な洋館が主体となっている。庭の隅に、周囲の景観と不釣り合いな純和風建築の離れと日本庭園があるのはその名残りである。

別荘の敷地は、東京ドーム二個分の面積を誇るが、その半分が原生林として手つかずのまま残されている。周囲三キロ四方に他に建物はなく、人里からも遠く離れている。一応、敷地は金網のフェンスで囲まれてはいるものの、こんな場所を好んで訪れる者は皆無といっていいだろう。人里離れたこの別荘であれば、いくらでもお嬢さまの変態的欲求を満たすことができるというわけで、隔離された隠遁生活を送るにはうってつけの場所といえた。

　――この日、私は徒歩とバスを使って、最寄りの郵便局に出かけてきた。タクシーを使わなかったのは、単純に手配できなかったからである。人手不足と観光客増加に伴う需要の増大がその原因だった。

先に述べたように、私がお嬢さまと暮らす別荘は僻地にあるため、一度の外出にはそれなりの時間を費やす必要がある。短くても一時間、長ければ二、三時間はかかるとみて間違いない。その間、別荘でひとり過ごすことになるお嬢さまの監視は、別荘中に張り巡らされた大量のセンサーが担うことになるのだが、バスの中でセンサーの反応を確認すると、別荘中のいたるところで反応があった。どうやら猫のように落ち着きなく歩き回られているようだった。

「きっと、また裸でうろうろされているのだろうな」

という私の予想は的中した。

所用を終え、帰宅した私を出迎えたお嬢さまは、案の定、一糸まとわぬ全裸姿で玄関に立っていたからだ。

「遅いじゃない！　いったいどこほっつき歩いてたのよ、このノロマ！」

開口一番、お嬢さまはそう叫んで怒りを露にされた。が、なにもかも丸出しの状態――胸に実った大きな乳房も、性格に似て生意気そうに尖った薄桃色の乳首も、陰毛が生えていないツルツルのアソコも――では、せっかくの憤慨も迫力に欠けるというものだ。

　私は丁寧に頭を下げた。

「申し訳ございません、お嬢さま。何分、まだ地理に不慣れなものでして、予定よりも時間がかかってしまったのです。どうかお許しください」

「いいえ、許さないわ！」

「･･････」

　怒鳴る声の音量を一オクターブほど上げながら、くびれた腰に手をあてる。大きな乳房がぶるんと揺れたのは、胸を突きだすように姿勢を改めたからであった。そして、その大きな乳房を、まるで私に押し付けるようにして、お嬢さまが距離を詰めてきた。乳房の先端が、私の身体に圧し当てられた。ぐにゅっ、という感触と共に。

「あなたが出かけてから、二時間もアタシはほったらかしだったのよ！？　二時間よ、二時間！　それだけの時間があったなら、軽く千回はイケたはずのに、あなたが居なかったせいで、アタシ、溜まりに溜まって、オナニーしても満足にイケなかったんですからね！　この責任、どうとるつもりなのよっ！？」

お嬢さまが感情に任せて威圧的な態度をとるときは、決まって性欲が高ぶっているときである。そしてその性欲は、自分で致すことでは解消できず、他人由来の刺激でなければ発散できないのだから業というものだ。

　私はお嬢さまに悟られぬよう、小さくため息を吐いた。

「･･････わかりました。とりましょう、責任を」

私はそう静かに告げると、お嬢さまの丸出しになっている股間をむんずと掴んだ。

「うひぃっ！？」

　お嬢さまの身体がビクッと震える。お嬢さまの股間は、すでに火で炙ったチーズのようにどろどろに溶けており、そのなかに、私は三本の指を思いっきり突っ込んだ。そして、ぐちゅぐちゅに濡れているマンコの中を、突っ込んだ指でもって、盛大に掻き混ぜた。

ぐちゅぐちゅっ、ぐちゅぐちゅぐぢゅぐぢゅぐぢゅぅうぅぅうぅぅ･･････っっっ！

その瞬間、派手に汁が飛び散って、お嬢さまがアヘ顔を晒しながら敏感に反応した。

「んほおぉおおおぉおぉぉぉぉぉおおぉぉぉおぉぉおぉっっっ！　ら、らめえぇぇぇえぇぇぇええぇぇえぇぇえぇっっっ！　い、いきなりっ、いきなりかかか掻き混ぜるなんてえぇぇぇえぇぇええぇぇえぇぇぇぇぇっっっっ！　ま、まだっ、心の準備ができてないのにぃぃいぃぃぃっっっ！　んほぉぉおぉぉぉおぉぉおぉぉぉおぉぉぉっっっ！　ははは反則よっ、反則よここここんなのぉぉおおおぉおぉぉぉぉぉおおぉぉぉぉっっっっ♡♡♡　んひぃいぃぃぃぃいぃぃぃいぃぃぃぃぃぃいっっっ♡♡　いいいイクッッ、イクイクイクうぅうぅぅぅうぅぅっっっ♡♡♡　んふほおぉおぉぉおおぉぉぉおぉぉぉおぉおぉぉぉっっっっ♡♡♡♡」

びくッ、びくびくびくくくううぅぅうぅぅうぅ･･････！

ガクガクッ、ガククガクガクガクウゥウウゥゥ･･････！

お嬢さまの身体がビクビクと痙攣し、足がガクガクと震える。澄ました美顔を無様なアヘ顔に変形させながら、白眼を剥いてイキまくる。

　すでに熟れに熟れているお嬢さまの膣マンコは、少しの刺激で絶頂に達するほど敏感になっており、少し指で膣内を弄っただけでこの有り様である。手マンでの連続絶頂はいつものことだ。しかし、私は、お嬢さまの膣内を掻き混ぜる指の動きを緩めることなく――いや、むしろもっと激しく掻き混ぜながら、お嬢さまの耳元で囁いた。

「口の利き方には気をつけなくてはいけませんよ、お嬢さま。ここでは私が「ご主人さま」なんですからね。そのことをしっかりと理解していただかなくては。さもないと、「罰」を与えますよ」

そう言ってお嬢さまの身体を強く抱きしめながら、さらに激しくマンコの中を掻き混ぜる。ヒダヒダの膣壁を強く擦りながら、弱点でもある子宮口を指先で何度も何度も刺突して、玄関が、お嬢さま由来の愛液でびちょびちょになるまで手マンを繰り返した。

ぐぢゅぐぢゅぐぢゅぐぢゅっ、ぐぢゅぐぢゅぐぢゅぐぢゅぐぢゅぅうぅぅうぅぅぅ･･････っっっ！

お嬢さまの声が絶叫に変わった。

「んひいぃぃいぃいぃぃいぃぃいぃぃいぃぃぃいぃぃぃぃぃいぃいぃぃぃっっっっ♡♡♡　も、申し訳っ、申し訳ございませんっ、おおおお赦しをっ、お許しをおぉおぉおぉおぉぉぉぉぉぉおぉぉおぉぉぉっっっっ♡♡♡　どうかお許しくださいませっ、ごごごご主人さまあぁぁああぁあぁぁぁあぁぁぁあぁぁぁあぁあぁぁぁぁっっっ♡♡♡♡　んひぃいいぃぃいぃぃぃいぃぃいぃぃぃぃいいぃぃぃぃっっっ♡♡♡♡　んほっ、ふほっっ、んおっほおおぉぉおぉぉおぉおぉぉぉおぉぉぉおぉぉおぉぉおぉおぉおぉぉぉぉおぉぉおおぉぉぉおぉぉっっっっっ♡♡♡♡♡」

ぶしゅっ、ぶしゅぶしゅっ、ぶしゅぶしゅぶしぃいぃいぃぃぃぃ･･････っっっ！

股間から盛大に潮を噴き、白目を剥きながら涎を垂らし、顔面を涙や鼻水でぐちゃぐちゃに濡らしながら、無様なアヘ顔を晒してイキまくるお嬢さま。しかし、その表情はどこか恍惚としており、快楽に酔いしれて嬉しそうでもあった。それはそうだ。超がつくほど変態になってしまったお嬢さまは、酷いことをされればされるほど、幸せになってイケるのだから。

「わかればいいのです、わかれば」

そう言って、私はぐちょぐちょになったお嬢さまの淫乱マンコから、指を躊躇なく引き抜いた。その瞬間、最後の絶頂に達したのか、お嬢さまの全身から力が抜けた。

「んほぉぉぉぉっ、おほぉおぉぉぉぉぉ･･････♡♡♡」

お嬢さまがその場に足から崩れ落ちるようにして倒れ込んだ。ビチャッという音がして、愛液が飛び散る。自分由来の淫汁池に座り込んだその顔は、相も変わらず恍惚としており、快楽と快感の余韻によって支配されていた。半ば昇天しているのか、瀕死の貝のように舌がだらりと垂れ下がっており、実に幸せそうである。

「いい子にしていれば、もっと激しく責めて差し上げますよ、お嬢さま。私の命令をしっかり聞くほどいい子にしていれば、ね。わかりましたか、お嬢さま」

「は、はひ、はひぃいぃぃぃ･･････わ、わかりました、ごひゅじん、さまあぁああぁああぁぁあぁ･･････♡♡♡♡」

　このやり取りでも判るように、この別荘での上下の関係は、私が主人であって、お嬢さまはそうではないのだ。

ただし、これは私が望んだことではない。決して、断じて、望んだことではないのだ。

だがこれは、お嬢さまをコントロールするため、そして私の「野望」を叶えるために、取らなくてはならない選択だったのである。

　　　　　　　　　　　　･･････続きは本編でお愉しみください。